# 結びにかえて

## ―ピラミッド型ラダー・システムの確立とその問題点―

かくして，極めていりくんだ性格をもつ，明治初期におけるアメリカからの影響は急速に弱まってくるのであるが，たとえ不成功におわったとはいえ，明治の初期において，自然の貴族制ともいうべきものに対する強い志向があったことは，その後の我国の教育制度について考える上に極めて重要な点であるといえる。というのは，このような力強い志向があったればこそそれは，一時潜在しながらも，機会あるたびごとに，学制改革運動を支える力となって顕在化してくるとともに，やがては第二次大戦後のあのような抜本的な学制改革を可能ならしめる力ともなったと考えられるからである。それは又同時にいわゆる「学歴主義」にもとづく立身出世主義の風潮を，早くから生み出す最大の原因ともなり，ここに，我国における制度の改革にともなう新しいメンタリティーの醸成，つまり新しい社会的性格としてとらえることができる地位指向的性格の形成があったこと，しかしてこの新しい社会的性格の形成が，更に制度の変革をうながしていったことを改めて知るのである。しかして，このような制度変革のテンポと，その制度の枠組の中に生活している成員の社会的性格の変容のテンポのずれによっておこる一連の連鎖反応の固有の脈絡の中において，我国の教育制度は，外形的には，アメリカの教育制度と共通の単線型教育制度の採用を強く志向することになりながら，その機能の面においては著じるしくその性能を異にする制度を生みだすことになっていったことを知るのである。

すなわち，より具体的にいうならば，ライシャワー教授らによっても指摘されているように１９世紀の日本人の多くは，同時代の中国人が極めて強い地位指向性をもっていたのにくらべて，非常に顕著な目標指向性格を持っていたと考えられるのであるが[1]，このような日本人の目標指向的な性格は，自然の貴族制のインパクトを受けることにより，早いテンポで地位指向的なものに変化していったものとみることができるのである。ところでこのような日本における急速な社会的性格の変化は，当時の日本人の目標指向的性格が同時代のアメリカ人にみられた目標指向的性格とは，その本質において，異った性格をもつもので，当時のアメリカ人の目標指向的性格がすぐれて内部指向的なものであったといえるのに対して，日本人のそれは，身分階級制をとる封建社会において，極めて長いこと外的力によって地位への野望がおさえつけられていたために形成されたものであり，それは個々人の内心にまでくいこんでいく超越的宗教的価値観の体系，より具体的にはプロテスタンティズム的価値観にもとづくものではけっしてなく，より現実的で世俗的な価値観の体系といえる儒教思想に支えられたものであり，たしかにいまだ伝統指向的で儀式的な側面を残すものではあっても，状況のいかんによっては行為様式を容易に変更しうる側面をもつ極めて外部指向的色彩の濃いものとなっていたことに原因する変化であったといえるのである。[2]

従って我国においては，身分階級制をとる封建社会の外的圧力が，ひとたび能力に応じた上下の社会移動を認める自然の貴族制の考え方に通ずる概念が導入されることによって取り除かれるや，日本人の社会的性格は，アメリカ人等にはみられないテンポの速さで，急速に変化して行きはじめ，その目標指向的性格はゆがめられ急速に弱められて行くとともに，地位指向的性格が強化されていったといえるのである。しかして，やがてはこの学歴主義にもとづく立身出世の風潮を生みだすことになる社会的性格の

変化こそが次の大規模な制度改革を可能とした何よりも大きな原因となっていったように思われるのである。

ところで，このように急速な社会的性格の変化は，前に述べた原因の他にも様々なものがあったと考えられるのである。しかし，そのうちでも特に重要と考えられるものとして，次の二つのことを考慮する必要があるように思われる。その第一は，科挙制度の潜在的影響力であり，その第二は，明治以降急速におし進められた近代化政策によってもたらされた社会構造の変化である。まず科挙制度の影響についてみるならば，能力ある中国人をすぐれて地位指向的にしたと考えられる科挙制度は[3]，19世紀のアメリカにおける実力主義とは異り，極めて抽象化され形式化され，シンボリックなものとなってはいたが，明らかに徳と才能による支配を志向する実力主義の原則によって貫かれたものであり，ジェファソンの自然の貴族制の思想とも相通ずる側面を持つものであったことは，見落すことのできない点である。もっともジェファソンの自然の貴族制はすべての者に対して平等に機会の提供された公教育をその前提としたエリートの選別であったのに対して，科挙制度は，公教育を前提としないエリートの選別であり，科挙制度の研究者，宮崎市定教授の表現をかりるならばそれが「金のかかる教育をすっかり民間に委譲して，民間で自然に育成された有為の人物を，ただ試験を行うだけ[4]」という「はなはだ虫のいいやり方[5]」をとるものであったことを見落すことのできない点である。というのは，このようにすべての人々に開かれた無償の教育を前提としないエリート選別の制度であったためにこそ，それは，士，農，工，商の別を問わず，全ての者に平等に開放されていた制度であったにもかかわらず，結局は，試験の準備を充分になしうる余裕をもった階層の者にのみ有利なものとなり，階層の固定化に役立つとともに，試験の内容が，全く古典のみから選ばれていたため，有能なる人々を地位指向的にするとともに，おそろしく伝統指向的にし，中国社会全体のおどろくべき停滞の原因の一つなったと考えられるからである。このことは我国の教育制度のゆくえを考える上にも充分に留意されてしかるべきことといえる。

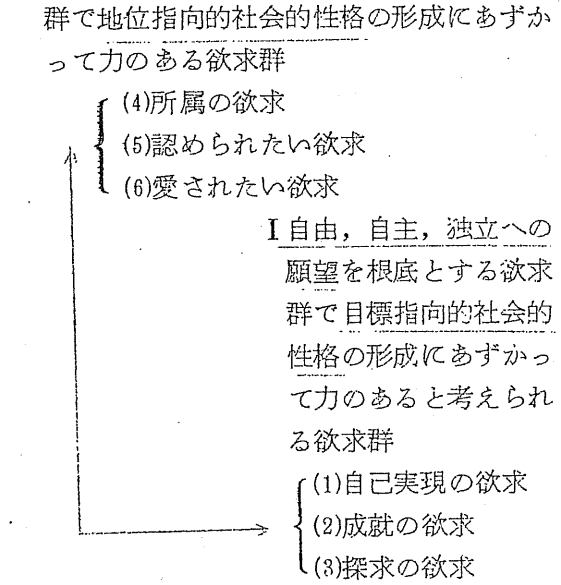
しかし科挙の制度には，士，農，工，商の別なく能力に応じてエリートを選び出そうとする合理性が貫かれており，我国においても，当時この科挙の制度のもつ合理性について知っていたものは，けっして少なくてはなかったのである。いうまでもなく，科挙の制度は，我国固有の統治機構であった，いわゆる封建幕藩体制とは相容れない性格をもつものであり，中国においては，科挙制度が，儒教文化の存続維持発展と切っても切れない関係にあったにもかかわらず，儒教が我国にとり入れられた際にも，それが儒教とともに大規模に採用されたことはなく，科挙制度の存在とそのもつ合理性について知る者達も，科挙の制度をそのまま採用すべきであると表面きって主張するのはいなかったようである[6]。しかし，身分階級制の不合理を是正するものとして，能力による抜擢，つまり自然の貴族制に対するあこがれは，科挙制度のもつ合理性を通じ，たとえ潜在的な形においてではあれ，かなり強力なものとなっていたものと考えられるのである。特に幕末になって，経済の発達するにつれ封建的身分階級制のもつ矛盾が深まり，特に下級支配者たる下級武士達の生活が相対的に窮乏化するにつれ，能力ある下級武士達の間に，自然の貴族制に共鳴する傾向が強くなっていったとして，けだし当然のことといわざるをえないのである。しかして，科挙制度に関する知識が直接間接に主として能力ある下級武士達の間に，形を変えて広がり，彼等に学問することが出世の道にもつながるものであることをそれとなく信じこませることになっていたものと考えられるのである。つまり多くの日本人の間には幕末すでに，学問によって立身出世しようとする，メンタル・クライメートはかなり濃厚なものとして醸成されたといえるので

ある。しかして，このような素地の上にこそ，「学制」の考え方とも相通ずる，否，それよりもはるかにラデイカルな側面をもつとさえ考えられる公共学校制度の確立が，近世末期蘭学の影響のもとに，佐藤信淵，正司考祺といった人人によって主張されることになったものと考えられるのである[7]。すなわち当時すでに自然の貴族制に対するあこがれは，少くとも下級武士達の多くの者にとって，強いニードとして，はっきり意識されるようになっていたということができるのである。しかして，このようなニードの形成にあたって，中国における科挙制度に関する知識は，中国の学校制度に関する知識とともに，たとえ潜在的なものではあったにしても，大きな役割を果していたものと考えられるのである。

次に明治以降急速におし進められた近代化政策によってもたらされた社会構造の変化についてみることにする。明治以降の急激な近代化政策によって，土地から引き離された大量の文字通り無産の都市労働者が生み出されたことと共に，禄をはなれた旧下級武士の転身したものをその中核として，急速に拡大再生産されていった，産らしい産をもたぬ新しい中産階級，すなわち，いわゆるサラリーマン階級の発生したことである。つまりこのような現象を通じて，日本は極めて早くから単に無産の下層階級を持っただけではなく，無産の中流階級という極めて特異な中流階級を発達させることにより「中産階級のいない国[8]」となっていったことである。しかして，日本の国民の大多数は，下層，中流の別をとわず，「おしなべて貧乏のどん底におかれ[9]」行き先きの見通しの暗い経済的に極めて低く不安定な状況におかれていたことを考えないわけはいかないのである。ところでこうした人々がどのような社会的性格を持ちやすいか教育心理学の説くところにしばし耳を傾けたいと思う。教育心理学の教えるところによるならば，人間の学習を動機づけ，学習を可能とする人間の基本的欲求には，次のようなものがあるとされている。

(1) 自己実現の欲求
(2) 成就の欲求
(3) 探求の欲求
(4) 所属の欲求
(5) 認められ，賞讃され，尊敬されたい欲求
(6) 愛されたい欲求[10]。

以上の6つの基本的欲求は相互に関係する欲求であると共に，それぞれ異った方向をもつ欲求群であり，これらの欲求を極く大まかに分類するならば，それは次の図に示すように，二つのグループに分けて考えることができるように思われる。




つまり，(1)から(3)までの欲求は，自由，自主独立，自己実現，自己完成の願望といったものをその根底とするもので他に制約されることなしに，自己の責任において自由に決定し行動したいと欲する欲求群とみることができる。これらの欲求群はいうまでもなく，これまでにたびたびふれてきた目標指向的な社会的性格の形成にあずかって力のある欲求群であり，学校制度の発達との関連においてみるならば，学校制度の多様化をおし進める力となる欲求群であるとみることができる。これに対して，(4)から(6)までの欲求群は，安全と安定への願望をその根底

とする欲求群で，地位指向的な社会的性格の形成にあずかって力のある欲求群であり，学校制度の発達との関連においてみるならば，学校制度の単一化の傾向をおし進める力となる欲求群であるとみることができるのである。これらの二つの欲求群の力関係についてみるならばどちらかといえば，(4)から(6)までの方の力が(1)から(3)までの欲求群よりも，より根源的であり，より力強いものであり，後者はある程度，前者の充足を前提とするか，あるいは前者がやがて充足されるであろうとの期待のうちにアージされる場合が多いように考えられるのである。

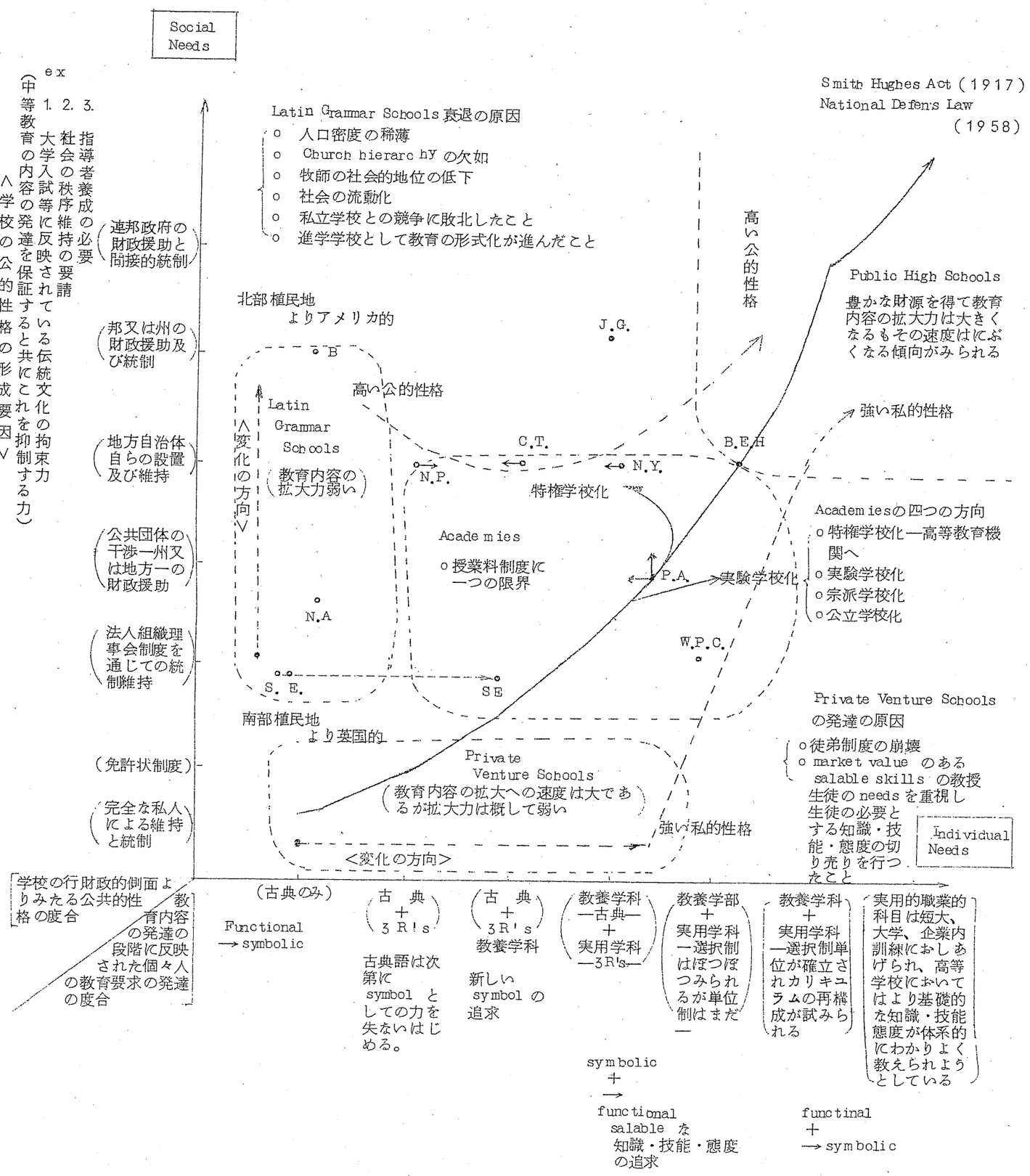
とすると，我国において，明治以降急速に生みだされることになった無産の，都市労働者の群と，いわゆるサラリーマンと呼ばれるこれ又無産の中間階級の発生は，人間にとって最も基本的欲求といえる安全と安定への欲求，とりわけ経済的安定への欲求の充たされない人々が大量に生み出されていたことを意味するものであったといえるのである。しかして彼等がまず第一に安全と安定を志向し地位指向的になっていったとして，けだし当然のことといわざるを得ないのである。というのは彼等に安全と安定を保証するもの，それはまずしかるべき職にありつくことであり，より高い地位に昇進することであり，又彼達に職と地位を与えてくれる組織に対して忠誠を誓うことであると受けとめられたとしてやむをえざることといわざるを得ないからである。このような状況において，彼等が強い地位指向性をもつとともに，彼等に安定した職と高い地位を約束するかに見えた学歴が異常なまでに重んぜられるようになったとして，無理からぬことと考えられるのである。このように自由，自主，独立，自己実現の欲求よりはまずもって安全，安定の欲求が，充たされていなければならないというよりさしせまった彼等のニードが，彼等を地位指向的にし，学歴指向的にし，学歴獲得の機会を均等化するための学制改革運動として学校制度単一化のための運動を展開させていったものと考えられるのである。

我々は，さきに，ジェファソン流の自然の貴族制の具現化ともいえるアメリカの公共学校制度の基礎が，皮肉にも，ジェファソン流のリパブリカニズムを部分的に否定するジャクソン流のエガリタリアニズムの主張，つまり，無産の移民の群すなわち都市労働者の群の教育要求によって確立されたものであることについてみてきたが，彼等の要求こそが，アメリカにおいてアメリカの学校制度単一化の傾向をおし進めた原動力でもあったことを思いおこすのである。ここに，日本の学校制度が，第二次世界大戦後，たとえ占領下という極めて特異な状況のもとにおいてではあれ，全く異った歴史的脈絡をもつものでありながら，アメリカの学校制度にならって，大規模に改革され，著しく単一化されえた最大の原因の一つをみいだすことができるのである。

ところが，アメリカの学校制度には，単一化の傾向以外の顕著な特色，つまり，多様化の傾向が認められ，その制度の外形的な単純さにもかかわらず，それはその内に，極めて多様で複雑な要素を内蔵するものであったのである。しかして，このアメリカの学校制度多様化の傾向は，実は，中等教育レヴエルにおいて最も顕著にあらわれていたものであり，この多様化の傾向は(1)ラテン・グラマー・スクール，(2)各種私立学校，(3)アカデミー，(4)公立総合制高等学校の四つの時期に分って発達を遂げたアメリカ中等教育の歴史を通じて認められる傾向であり，特に，ラテン・グラマー・スクールと各種私立学校又はアカデミー，各種私立学校とアカデミー，アカデミーと公立総合制高等学校の間で展開された競争を通じて促進されたものであったといえるのである。これらの学校の性格とアメリカ中等教育発達の方向を極く簡単に図式化して，一つの座標の上に示すならば，それは次頁の図のようなものであったといえるのである。

まず，ラテン・グラマー・スクールについてであるが，この学校はいうまでもなく，ヨーロッパにおいて特にルネッサンス期に充実された

# アメリカ中等教育制度の発達




〔新しい環境の下で次々に覚醒されていつた個々人の教育要求の拡大にもとづく教育内容の多様化・拡大化の方向 →〕

＜学校の私的諸性格の形成要因＞

（特権階級 上属中産階級の必要） → （新興中産階級の必要） → （一般大衆の多様な必要）

B. ＝ボストンのラテン・グラマー・スクール（1635）
N.A＝ニューアムステルダムのラテン・グラマー・スクール（1659）
S ＝シムズ・スクール（1634）
E ＝イートン・スクール（1759）
S.E＝シムズ・イートン・スクール（1805）
N.P＝ニューポートのラテン・グラマー・スクール（1640）
N.Y. ＝ニューヨークのラテン・グラマー・スクール（1732）
C.T. ＝チャールズ・タウンのラテン・グラマー・スクール（1716）
W.P.C.＝ウイリアム・ペン・チャーター・スクール（1683）
P.A. ＝ペンシルヴァニヤ・アカデミー（1753）
J.G. ＝ジェファソンの法案にみられるグラマー・スクール（1779）

| 教育機関名<br>特徴 | | Latin Grammar Schools | Private Venture Schools or Academies | Public High Schools |
|---|---|---|---|---|
| 特に学校を支持し，かつ学校から利益を受けていたと考えられる階級又は階層 | | ○特権階級（主として僧侶階級及び土地貴族）と<br>○ヨーロッパ的上層中産階級（土地を持つ商人，商人化した地主）の必要を満たす学校。 | アメリカ新興都市における<br>○新興中産階級（商人，職人，測量士，法律家，会計士，その他）と<br>○各宗派の必要を満たす学校。 | ○一般大衆；とりわけ新中流階級（中間階級）すなわちホワイト・カラー組織人達の教育を反映しやすく，そのため，middle class values が強調されすぎる傾向があるとされ，"Who Shall be educated ?" 等の著作が出される原因となっている。―この傾向は教師の出身階層及び彼等の持つ価値基準と関係があるとされている。 |
| 学校の役割 | どのようなタイプの人間を世に送り出そうとしていたか | 指導者とりわけコミュニティーリーダーたる牧師層の再生産をその役割としていた。<br>コットン・マザー，ジョナサン・エドワーズ的人間の育成を志向する学校であったように考えられる。 | 新興都市中産階級の拡大再生産の機能を果し，農民層，移民層の都市における大量の階級上昇を可能にするエレヴェーターの働きをしていたように思われる。<br>ベンジャミン・フランクリン的人間の育成を志向する学校であったように考えられる。 | 様々な種類の組織人達の拡大再生産を行う教育機関として，様々な能力の発見とその育成とをその任務とし，カウンセリング等の機能を通じて selecting agencies としての役割をも果している。 |
| | 特にどのような社会的性格の形成を助長したと考えら | 伝統志向的乃至は宗教的内部指向的性格の形成にあづかったと考えられる。彼等の目標に対する意識は明瞭であり，彼等は自分のなすべきことをはっ | より世俗的な内部指向的性格の形成にあづかって力があったと考えられる。彼等も又目標に対する意識は明瞭で，自分のなすべきことを自覚していた | 他人指向的で，状況的性格を助長する傾向が強い。ところが現代のすべての者に開放された，否，労働市場の情況等からなかば高等学校教育が全ての |

| 教育機関名<br>特徴 | Latin Grammar Schools | Private Venture Schools or Academies | Public High Schools |
|---|---|---|---|
| れるか。 | きりと自覚していた。しかしその目標意識は，信仰的であり，宿命的であり，聖職観，天職観にいろどられたものであったといえる。<br>プロテスタンテイズムの倫理の確立 | といえる。しかして，個個の人が何を学校に期待すべきかの自覚なしに，ただ莫然と学校に入ってくるというようなことはなかった。しかし，彼等の目的意識は，信仰的なもの，あるいは，柔軟な理性に支えられたものというよりは，極めて信念的なものであり，一度その目的意識が彼等の内心にきらめくと，その目的意識で一生を貫ぬこうとする傾向があり，彼等の行為はある種の使命観に支えられているかのごとく見えた。しかし，それは幼い頃両親から植えつけられた偏見にすぎないものであったかもしれない。しかし，このような目標指向性は学校において，培われるというよりは学校の教師が，子供の感情生活の中にまで入り込むことはなかった。教師が生徒の目標指向性を培う働きをしたとするならば，それは教師に対する反抗をなかば教師に強いられるという形においてであり，教師と生徒の間柄は極めて im — | 者に強制されているとといった方がより適切な情況の下にあって個々の生徒達は，自分が学校に期待すべきものを自覚していない場合が多くなっており，彼等は学校入学後において，自分の欲するものを，自己の能力及び適正と，社会の要求しているものとをにらみあわせながら，決定していくことをせまられる。その際彼等は教師やカウンセラーの助言やら，友人達の言動に影響されながら自己の目標をさぐりだしていくのであるが，心理テストやカンセリング技術の発達は，ともすると彼等の主体性をうばいがちとなり，知的に状況の変化を理解しえない場合には，極めて状況的で，環境順応的になりやすいと共に環境それ自体が複数の方向をもって，変化している時，彼等は不適応を起しがちである。不適応を起さないまでも，彼等は安定を求め地位を追い求める者となりやすく目標指向的性格を弱めて行く傾向が見受けられ |

| 教育機関名<br>特徴 | Latin Grammar Schools | Private Venture Schools or Academies | Public High Schools |
|---|---|---|---|
| | | personal なもので，教師は自分の仕事の限界をよくわきまえており，教師は生徒あるいは両親の欲する知識，技能，態度の切り売りにつとめていた。<br>彼等（生徒）は，様々な点でジャイロスコープ的にならざるをえなかった<br>資本主義の精神の涵養 | る。<br>このような傾向は民主主義そのものをおびやすものであるとして，状況の変化を知的に判断し，状況の変化に応じた柔軟性のある意志決定の重要叫ばれ，そのような意志決定をなしうる態度の育成が主張され，いかにすれば，他人指向的性格の柔軟性を保持したまま，自律性のある人間を育成することが出来るかといったことが問題とされている。 |
| 学校をとりかこむ社会の特徴 | 英国植民地としての社会ではあったが，英国の伝統はあらゆる意味でくずれつつあった社会。無限ともみえた土地があったため努力さえおしまなければ，誰れでも容易に，多くのイギリス人にとった夢であった地主となることができた。すなわち水平移動は，そのまま垂直移動をも意味したため，class symbol としての教養は実際的な意味を失ない。古典教養が階級上昇とは結びつかなくなりつつあった社会。依然と | 農業中心から商業中心へ，商業中心から工業中心へと急速に変しつつあった社会。small government が理想とされ，個人主義が謳歌され，はげしい競争の展開された社会。この外部社会の急速な変化ときびしい競争にのみこまれずに生きのびるためにはどうしても心の内部に安定を見出さざるを得ない社会。しかして，この内面的なタフネスさえそなえておれば，都市における競争には敗れても，西部において敗 | 高度産業資本主義社会として，(1)高度に組織化され(2)機械化され(3)専門化され(4)都市化され(5)相互依存を強いられ(6)流動性と共に階層化が進み分極現象の起りつつある社会それは容易に把握しがたく，絶えず temporal な失業におびやかされ，対話を困難にし，個人を孤独にしながら，独立の機会を与えない，差別感不安にさいなます社会。絶えず流動しながら，分化，拡大，再統合の行なわれている社会。それは個々 |

| 教育機関<br>特徴 | Latin Grammar Schools | Private Venture Schools or Academies | Public High Schools |
|---|---|---|---|
| | して，農業中心の社会ではあったが，中世的階級社会の抑圧から急速に解放されつつあった社会。 | 者復活戦に加わることのできた社会。<br>彼等の欲した教育は実力による競争の世界において，競争にうちかつことのできる実際の役に立つ知識，技能態度を与えてくれるものであった。人人は，学校教育をけっして軽視してはいなかった。しかし，学校教育のあるなしが階級上昇のドミナントな手段とはなりえなかった社会において，実際の役に立たぬ形式的な学校教育は antiintel-lectualism の運動と共に葬り去られ，学校が market value のある salable skills を売ってくれるものである時それは高く評価された。 | 人の基本的心理的欲求である自由と独立，並びに安全と安定への願望を調和的に満たしてはくれそうにもない社会。<br>「オーガニゼーションマン」「孤独なる群像」「ホワイト・カラー」「イメージ」等の本が次次に書かれ，ベスト・セラーズとなっている社会。<br>「自由からの逃走」が試みられ，それが問題となっている社会。<br>形式的学校教育が再び重視され，Natural ari-stocraacy の確立が改めて強く志向されながら，meritocracy への恐れが，同時に問題とされている社会。 |
| リーダーとなるに必要な条件 | 門地・家柄＋実際的能力<br>↓<br>これの維持のために class symbol たる教養は欠かすことができなかった | 富＋実際的能力<br>anti intel-lectural な力 | IQ＋effort 抽象化され symbolic になりつつある能力<br>↓<br>テスト等を通じて計量しうる能力 |

人文主義学校の一種がアメリカに移し植えらたものであり[11]，その教育内容は，古典語，つまりラテン文法とギリシヤ語の初歩にかぎられており，その社会的機能は，既成特権階級に接近し，これと融合しようとしていた上層中産階級の教育要求をみたそうとするもので，主としてこの階級に属する人々をより洗練したものとする役割を担っていたものであったということができるのである。この学校は，もともと中世の大学に対抗して設立されたものであったといえるのであるが，アメリカに移し植えられる頃には，大学進学の準備教育を行う学校としての役割をも果たすようになり，中等教育機関としての色彩を強くもつ学校となっていたのである。その設置，維持，管理運営は，土地の寄付と，その土地の寄付にあたって下付される特許状の規程にもとづいて組織される法人組織を通じて行なわれていたのであるが，この学校がアメリカに移し植えられるや，アメリカにおいは，当時土地の価格が極めて安かったことや学校の設置維持のため荘園を一つまるごと寄付するような特に富裕なる階層がいなかったこと[12]等が原因して，ボストンのラテン・グラマー・スクールのように，人々の税金によって維持され，タウンの役員によって管理される無償の学校つまりその行財政面からみるかぎり極めて公共的性格の高い学校となっていたのである[13]。しかし，早くから進学準備校としての性格を確立していたこれらの公立のラテン・グラマー・スクールの教育内容は極めて形式化され，固定化されてしまい，カリキュラム面における発達は，ほとんど認められなくなっていたのである。ところが，植民地時代の末期及び建国の初期の頃において，東部大西洋岸沿いの開港都市商業都市において，行財政面に関するかぎり極めて公共性の低いつまり私的性格の強い各種の私立学校が雨後の筍のごとく発生してくるのであるがこれらの授業料のみによって維持されていた学校は授業料とのひきかえに，生徒及び父兄の要望に答えて可能なかぎりあらゆる有用な知識，技能，及び態度（マナー）を文字通り切り売りしようとしたため，その教育内容を急速に豊かなものとし進学準備教育から，アメリカにおいて急速に崩壊していった徒弟制度の教育機能までをも引き受けるようになったことからいわゆる職業教育を準備する学校となっていったのである[14]。このようにして，より幅広い階層の人々の教育要求に答えることによって，この種の各種私立学校は，一部特権階級の再生産の機能のみをもつ学校，つまり，ラテン・グラマー・スクールから生徒をうばいとり，その衰退の原因となっていったのである。しかして，この私的性格の強い各種の私立学校は，個々人のもつ具体的な教育要求をも充たして行くことによって，その公共性が認められるようになり，法人化が許されるとともに新しいタイプのアメリカ固有の中等教育機関，すなわち，アカデミーの誕生をうながすことになるのである。ところで，半公半私的性格をもつこのアカデミー[15]は，公立ラテン・グラマー・スクールのもつ行財政面並びに指導者養成機能等における高い公共的性格と，各種私立学校のもつ強い私的性格とを共に吸収しながら，個々の人のもつ幅広い私的教育要求を公的に充たしてゆくことを可能とする新しい中等教育機関つまり，無償の公立総合制高等学校の発達を促がしてゆくことになるのである。以上のような経過を経て，アメリカの中等教育制度は，アメリカ固有の土壌の上で，単一化の傾向と共に，多様化の傾向をもつことになったのである。ところで，この多様化の傾向は，特に各種私立学校乱立時代とアカデミー時代において，著しく促進された傾向であったといえるのである。しかして，この時期に多様化の傾向をおし進めたものは，なんといっても，これらの学校が，授業料とのひきかえに切り売りしていた，いわゆる市場価値のある知識，技能，態度を購う経済的力をもっていた新興中産階級の発生であったといわざるを得ないのである。ところで，このアメリカの新興中産階級のもつヨーロッパのそれと異る特色は，ヨーロッパの新

興中産階級が，常にそれに接近し，機会あるたびごとにそれと同化しようとしていた特権的な上流階級を自らの上にいただいていたのとは異り，特権的上流階級というべきものを欠いていたことにあったといえるのである。このようなアメリカにおける特殊事情が，より安定した生活を望むアメリカの中産階級に属する人々を，階級上昇のために必要とされるシンボリックな教育すなわち古典教養を追い求めるよりはむしろ実際の役に立つ，よりファンクショナルな知識，技能，態度を身につけるようかりたてていったものと考えられるのである。かくして，19世紀のアメリカ社会が，その頂上を欠くものであったがために，階層化されておりながらある特定のルートを通じて，階層間に能力に応じた上下の社会移動つまり流動性が公式に認められている社会においては，とかく形成されがちに思われる地位指向的性格の形成が抑制され，19世紀のアメリカ人をすぐれて目標指向的にしていったものと考えられるのである。つまり，アメリカのよりよい生活を志向する中産階級に属する者達は，たまたま，その上に上昇して行くべき特権的上流階級を欠いていたがために，階級上昇に必要なクラス・シンボルを身につけるための教育よりは実際に彼等の生活を充実させることのできる知識，技能，態度を，自らの好みと能力とに応じて，身につけるよう欲するようにならざるをえなかったとみることができるのである。かくして，すくなくとも１９世紀前半までのアメリカは，一応の産を持つアメリカ人達に，先にあげた人間の基本的欲求のうちの(1)から(3)までの欲求群をまずもって充たすことが，実は，(4)から(6)までの欲求群を充たすことにも通ずるものであることをそれとなく教えるものであったといえるのである。

かくして，アメリカの教育制度は，アメリカの特色ある新興中産階級に属する人々の様々な教育要求を反映して，著しく多様化されることになり，この多様化の傾向がジャクソン流のエガリタリアリニズムに支えられた単一化の傾向と結びつくことによって，ジェファソン自らが考えていたよりは，はるかにエラボレートな教育制度，つまり，単位制と選択制の確立によって一見しただけでは，識別不可能な流動性に富むいくつかのプレスティージ・ピラミッドをそのうちに内蔵する公共学校制度が生みだされることになったのである。

ここに，現在の我国の教育制度が，アメリカの制度にならって，その外形を整えながらも，その機能の面において，両者の間にいちじるしい差異が見出されるようになった最大の原因がひそんでいるように思われるのである。つまりアメリカの教育制度が，単一化の傾向と共に多様化の傾向を早くからもつことにより，個々人のニード及び，能力，適性に応ずる教育を前提としたエリート選抜の仕組をもつようになったのに対して，我国の教育制度には，単一化への傾向は強く認められても，多様化への力強い傾向は認められず，機能的には，どちらかというと宮崎教授の指摘をまつまでもなく，科挙のもつ機能に近ずく傾向を顕著に示してきたということができるのである。しかして，このような相異は，結局，１９世紀において，いわゆる新興中産階級が圧倒的に支配的であった国か，中間階級は生れても，いわゆる新興中産階級は育たなかった国であったかの相異に照応するものであったといえるのである。それは又，１７世紀，１８世紀を通じて，手頃の固定資産，つまり，土地をもつ商人あるいは商人化した地主層が，社会更新を指導してきた国であったか，17世紀，１８世紀を通じて形成されていった，産らしい産を持たない組織人，つまり武官官僚としての武士，とりわけ下級武士層が，１９世紀中頃になって，外的な刺激を受けて，激しく動きはじめた，急激な社会変動の牛耳を執った国であったかの相異に照応する違いであったともいえるのである。

もっとも，我国においても，最近の教育制度多様化への努力にはみるべきものがといえる。しかし，それは，明らかに外国の資本との競争

をせまられている産業界からの要請，つまり一方的な外からの要請に答えようとするためのものであり，日本人の多くが，経済的な不安定の恐怖から一応解放されたために，その目標指向的性格を回復しえたことに原因するものではないように思われるのである。この辺に，我国の最近における多様化への動きにみられるひ弱さを認めざるを得ないのである。もし，この多様化の傾向が，経済的不安定の圧迫から一応解き放たれた上で，日本人の目標指向的性格が，自覚的に自律的に回復強化されたことを前提するものではなく，単に外部から強行しようとするものであるならば，結果的には，秩序維持の機能のみを重視すを効率の悪い身分階級制に応ずる教育を行う多様化へと後退してゆく可能性は強くなっても，個々人の能力適性に応じた教育を可能とする効率の高い多様化へと力強く前進していくことは非常にむずかしいことわように思われるのである。しかして，このような結果が，合理主義の精神に支えられる外国資本との競争をせまられている産業界の要請に答えうるものでもないことは，改めていうまでもないことである。

もっとも，この問題は，ひとり我国だけの問題ではなく，高度に発達した産業社会が共通に直面している問題でもあるといえるのである。しかして，この問題は，実はこれまで我々が我国とは対照的な性格をもつ国としてとられてきたアメリカにおいてもみられはじめた問題でもあるのである。すなわち，産業資本主義の高度な発達にともない，アメリカ社会は，機械化され，分業化され，専門化されると同時に統合化が促進され，高度に組織化され，階層化が進み，一方において相互依存的になり対話の重要性が強調されながら，他方においては，対話の可能性をはばむ，高い流動性と差別感が増大しつつあり，分極現象が顕著なものとなってきているのである。このような状況の下において，かつては独立した個人でありえた中産階級に属する人々も現在では，流動性の高い組織の中に組み込まれてゆき，差別感に悩まされながらも，相互依存を強いられ，自由と独立への願望とともに，所属の欲求，及び承認の欲求等を含む安定への願望を調和的に充たしていくことは非常に困難なこととなっており，他人指向的になることをせまられるとともに安定を求め，地位を追い求める人とならざるをえなくなってきているのである。このような動きにつれて学校教育が形式化され，ファンクショナルな教育よりは，シンボリックな教育が重視される傾向は顕著なものとなってきているのである。しかし，ここで注目すべき点は，このような社会変動に応じてみられる教育機能の変化の傾向は，やがてアメリカ社会にも「メリトクラシの勃興[16]」を助長することになるもので，農本主義の国と高度の産業資本主義の国という次元の差こそあれ，やがては中国がかつて科挙制度を確立することによって得たと同じ結果を得ることになりはしないかという危惧の念が持たれており，このような傾向に対する強い抵抗がみられることである。しかして，人々に他人指向的になることをせまる高い流動性をもちながら重層化されている現代社会においていかにすれば，個々人の自律性を回復し，人々が自己の能力と適性とを正しく判断することによって，自らにとっても社会にとっても共に利益となるような自己の役割りを見出していけるようになるかということが真剣に論じられ，他人指向的でありながら自律的でありうる人間は，いかにすれば，育成することができるかといった問題が教員養成学部の学生達（大学院生）の間でもまじめにとりあげられ熱心に論じられているのである。このような問題は，民主主義の死活問題とも関連することであり，それだけにこの種の問題の追求には，極めて厳しいものが感じられたわけである[17]。

以上のようなアメリカ社会の問題を目の当りにのみるにつけ，問題として感じられることは我国において，いかにすれば自然の貴族制の概念の導入によってもたらされたと考えらるいわゆる「学歴主義」のもつ合理的な側面を失なわ

ずに，そのもつゆがみを是正し，実のある多様化政策を推進することができるかということである。つまり，我国に「学歴主義」の風潮が出来上っていたということは，身分階級制の枠を越えた能力による移動を可能にすることを意味するものであるとともに[18]，このような学歴というパスポートによる移動が，一般的になっているとはいえ，子弟に高等教育をあたえる機会をもたなかった労働者階級[19]に対しては，その恩恵をもたらすことができず，「労働者の息子はエリートの地位から排除されており，この下流階級からビジネス・エリートへの進出が目立って多くなっているイギリスと対蹠的となっている[20]」という現象が，いまだに残っていること。就職後，終身雇用制及び年功序列制とのだき合せによって学歴が身分化しており，いわゆる「学歴身分」なるものが作りあげられていること[21]。学校教育の形式化及び不徹底によって，学歴の看板に偽りが生じてきており，学歴に対するイメージがひどく虚像化してしまっていること等によって，本来なら，実力主義を保証する形において機能すべきはずの学歴主義が実は「実力主義を阻むもの」となっている事実に留意して，こうした我国における学歴主義のもつゆがみを是正してゆく必要のあることを痛感するのである。と同時に，この学歴主義のもつゆがみは，すべての人々に開放されている公共学校制度を通じて個々人の(1)から(3)までの欲求をまず実際に刺激し，これを充足させていくことによって，より多くの人々に(4)から(6)までの欲求をも充足させていくことができるようなシステムを考え出すことを通じて，実質的に是正されていくべき性格のものであり，又学校制度の多様化もこのようなシステムの確立を媒介とし実現されるべきものであると考えるのである。さもないと外形的な枠組のみをいかに多様化してみても，それは単に制度化された教育の形骸化と形式化の傾向を阻止しえないばかりでなく，かえってこれらの傾向を促進することにさえなりかねないものであり，ひいては社会経済面における停滞の原因ともなり，産業界の要請にすら，答えることができなくなるおそれを多分にもつものであるからである。

註

(1) Fairbank, John. Q; Reischauer, Edwin O, Craig Ambert M., East Asia, The Moder-n Transformatiom, Houghton Mifflin Company, Boston 1965. P181

(2) このようなみかたは，ウェーバーマックス；梶山力，大塚久雄訳；プロテスタンテイズムの倫理と資本主義の精神（上，下）岩波文庫昭和30年（1955）及び昭和37年（1962）丸山真男；日本政治思想史研究，東大出版会，昭和40年（1965）ベネデイクト，R；長谷川松治訳；菊と刀－日本文化の型－上，下昭和26年（1951）リースマン；孤独なる群衆，op.cit. 等に負うところ大である。

(3) この有能な中国人の地位指向性は筆者の米国留学中にも強く感じさせられた点であり，日本人留学生がどちらかというとアメリカ留学中に実質的な経験を深めることを重視し，学位をとるといった形式的なものにはさほど関心を示さないのに対し，中国人留学生（台湾からの）が日本人には異常と思われるほどの学位に対じてより強い執着をみせていたことはその一つのあらわれといえると思う。

(4), (5) 宮崎市定；科挙，中国の試験地獄；中公新書，昭和38年（1963）P.203

(6) 科挙制度のもつ長所に気づきつつも，その短所をも知るが故にその移入に反対していた人人として，ドア博士は荻生徂来，広瀬淡窓，正司考祺，雨森芳州，湯浅常山，中山昌礼といった人々をあげ，又，科挙を改良して採用すべしと主張した人として安井息軒をあげている。Dore R. P; Education in Tokugawa Japan; Berkely and Los Angeles 1965 PP.190—204 参照

(7)中泉哲俊；日本近世教育思想の研究，吉川弘文館，昭和４１年（１９６６）PP.１４５—１６２もっとも佐藤信淵や正司考祺らの考え方には蘭学の影響が強くみられとされている。

(8)大河内一男；日本的中産階級；文芸春秋社，昭和３５年（１９６０）PP．５５—９０ 参照

(9) Ibid ，P．７３

(10)塚田毅；教育心理学，共同出版社，昭和３１年（１９５６）P．１９６その他を参照

(11)イギリスの人文主義学校が，ラテン・グラマー・スクールと呼ばれていたのに対して，フランスのそれは，リセ・コレージュ，ドイツのそれはギムナジウムと呼ばれていた。Brubacher，John S，；History of the Problems of Education op. cit，PP．４２０—４２９ 参照

(12)当時の英国において，いかに教育に対する寄付が盛んであったかについては，Jordan，W．K：Philanthropy in England（１４８０—１６６０），GeorgeAllen and Unwin Ltd，１９６４，PP．２７９—２９７，Jordan．W．K．The Charities of London（１４８０—１６６０）GeorgeAllen and Unwin Ltd，１９６０，pp．２０６—２５０

(13) Small，Walter Herbalt；Early New England School，（１９１４）Inglis，A．J；Principles of Secondary Education，（１９１８）．Martin，George．H；The Evolution of Massachusetts Public School（１９２３），Seybolt，Robert Francis；Public School of Colonial Boston（１９３５）．Morison S Eliot；The Intellectual Life in Colonial Mew England（１９５６）等の文献を参照

(14) Seybolt Robert．F；Apprenticeship and Apprenticeship Education in Colonial New England and New York；（１９１６），Seybolt．Robert，F．；The Private Schools of Colonial Boston（１９３５），Bailyn，Bernard；Education in the Forming of American Society（１９６０）等参照

(15)半公半私の学校が生れてくる傾向は，ボストン，ニューポート，ニューヨーク，フィラデルフィア，チャルズタウン等の都市に早くから見受けられる。このような傾向に関してはBridenbaugh，前頁の(2)，Carl，Cities in the Wilderness；（１９６０）及び同じくBridenbaugh のCities in Revolt（１９６４）に明らかである。

(16) Young，Michael；The Rise of the Meritocracy １８７０—２３３ a Pelican Book，１９６２

(17)このような議論は，筆者のウイスコンシン大学在学中にShaping of American High School，Harper & Row．Publishers，１９６４ の著者として知られるクルッグ教授（Dr．Edward A Krug）の担当しておられた「社会問題と教育」〝Social Issues and Education〟のコース等でよく耳にした議論であった。

(18)萬成博；ビジネス・エリート．op．cit，pp １３９—１４３，(19) Ibid，p １２２

(20) Ibid．p．１３６

(21) 新堀通也；学歴一実力主義を阻むもの，ダイヤモンド社，昭和４１年（１９６６）pp．５１—５６

４２年度発行の職業訓練に関する調査研究報告書

| | | |
|---|---|---|
| ８号 | 総合職業訓練所における高卒訓練生と中卒訓練生の比較 | ：安江　節夫・富田　康士 |
| ９号 | 技能（普通旋盤作業）の通し評価法について<br>―― 第３報・技能時間の累積分布の型と時間の技能評価 ―― | ：古賀　一夫 |
| １０号 | 通し評価法による技能評価の一例<br>―― ４２年度全国総訓技能競技大会・旋盤作業 ―― | ：古賀　一夫 |
| １１号 | ヨーロッパの技能者養成 | ：内田　悦弘 |
| １２号 | 技能の習熟構造に関する研究(I) | ：手塚　太郎 |
| １３号 | 「学制」に関する一考察<br>―― 技能軽視の風潮は何故生じたか ―― | ：木村　力雄 |

調査研究部報告書バックナンバー

| 年　　度 | 内　　容 |
|---|---|
| ３７年度　No.1 | ・中央職業訓練所及び附属総合職業訓練所の訓練生の素質並びに選考方法に関する考察 |
| | ・単純反復作業の練習曲線と準備性適時性に関する予備実験の結果報告 |
| | ・転職者訓練実態調査結果報告 |
| ３８年度 | ・年令と単純反復作業に現われる練習効果の関係 |
| | ・旋盤作業及び仕上作業に関する技能訓練効果測定 |
| | ・機械工基本実技訓練調査 |
| ３９年度　No.1 | ・機械工電機組立工基本実技訓練内容調査 |
| | ・技能訓練効果測定（自動車ガソリンエンジン整備、電工配線作業） |
| | ・米ソの新しい職業訓練理念（紹介） |
| | ・米国の人的能力開発訓練法（Ｍ．Ｄ．Ｔ．Ａ）について |
| ３９年度　No.2 | ・技芸、技能的職業の練習開始時期に関する調査 |
| | ・中高年令者の雇用並びに労働能力に関する調査 |
| | ・技術革新に伴なう技能労働の変化に関する調査 |
| | ・技能の習熟に関する研究（その１）　――訓練期間における旋削技能の変化―― |
| ４０年度　No.1 | ・全国総訓技能試験に基づく技能度測定 |
| ４０年度　No.2 | ・訓大附属総訓修了者の実態調査報告 |
| | ・旋盤訓練における技能習熟の過程 |
| | ・技術革新に伴なう技能労働の変化に関する調査（２報） |
| | ・熟練技能労働者の就職年令・学歴の調査 |
| | ・西独逸の職業教育 |
| | ・フランスの職業訓練と技術教育 |

| 年　　度 | 内　　容 |
|---|---|
| 41年度　7号 | ・高等学校卒業を入所資格とする事業内訓練の実態……安江　節夫、富田　康士 |
| | ・旋盤訓練における技能習熟の過程について（第2報）……戸　田　勝　也 |
| | ・技能（普通旋盤作業）の通し評価法について（第1報）……古　賀　一　夫<br>—寸法公差内のねらいどころと仕上げ可能な最小公差— |
| | ・技能（普通旋盤作業）の通し評価法について（第2報）……古　賀　一　夫<br>—製作寸法誤差分布の正規性と寸法精度の技能評価— |
| | ・技能に関する研究についての一考察……石　橋　泰　彦 |
| | ・訓練成績と職場適応に関する分析的考察……岡　村　一　成 |
| | ・衝動傾向と職業適性に関する一研究……岡　村　一　成 |
| | ・英国の技術教育と産業訓練法の特色（紹介）……内　田　悦　弘 |
| | ・生産工学におけるサンドウイッチ方式学位コースの未来像（紹介）…内　田　悦　弘 |
| | ・英国工科系大学におけるサンドウイッチ方式<br>デイプロマ・コースの技術教育（紹介）……内　田　悦　弘<br>—主として英国ノーサムプトン・カレッヂの実情紹介を中心に— |
| | ・スウエーデンにおける職業指導員の訓練について（紹介）……戸　田　勝　也 |

昭和43年3月25日発行

発行者　職業訓練大学校調査研究部長　宗　像　元　介

職　業　訓　練　大　学　校

東京都小平市小川西町2210

電話　0423(41)3331